

● 図書紹介 ●

B6判
236頁

『きこえない人』

「きこえない人ときこえる人」

廣瀬信雄訳

クライニン・クライニナ 著

新読書社
2,300円

聴覚障害というわれわれはどのようなことを想像するであろうか。仕事の効率を第一に考えるわれわれには聴覚に障害があるということが、不便さとしてしか捉えられないのではなからうか。この本は人間にとって聴覚に障害があるということは確かに不便ではあるが、克服できる障害であるということを知らせてくれている。が、この本を読み終えるとそれ以上の収穫があることに気付く。

本書ではまず第1章でいろいろな興味深い実験等の紹介を組み込みながら、聴覚の仕組み、聴覚障害とことばの関わりがわかりやすく説明してある。聴覚障害の専門家でない読者にも十分理解でき、きこえとことばについての新たな発見をすることができる。ろう者の会話に使われる身ぶり言語（手話）についても書かれてある（第3章）。手話とは話しことばを身ぶりに置き換えたものだと考えられているかもしれない。しかし、手話はきちんとした体系をもった立派な言語なのである。また、聴覚障害者を援助するさまざまな機器についてもわかりやすく紹介されてある（第5章）。単なる機器の紹介が羅列されているのではなく、実際の使用状況、便利さや不便さなどが使う側の立場で紹介されている。電話の発明で知られるアレクサンダー・グラハム・ベルと聴覚障害者の関係など、世間あまり知られていない話も書かれてある。このようにこの本には聴覚障害に関する基礎的な事柄がわかりやすく解説してある。

しかし、本書を特徴づけているのはそういうことではない。本書にはたくさんの聴覚障害者の話が書いてある。たとえば、第2章では聴覚障害者サーシャのことが書かれてある。サーシャが3歳の頃から

大人になるまでの半生期を通して、聴覚障害の実態、教育、家族、人間成長の記録が具体的に物語っている。第1章で聴覚がいかに関人にとって重要であるか、その聴覚に障害があることがいかにその人間の一生にとって大きな影響を与えるかを知った読者はこのサーシャという一人の聴覚障害者を通して、人間の底しれぬ能力、素晴らしさを感じ、救われる思いをするのである。そして、聴覚に障害があることが人間にとっていかに表面的なことであるかを思い知らされるのである。その他に、幼児のときに聴覚障害になったアンドレイの話や、大人になってから聴力を失った女性アナスターシャの話など、聴覚障害者本人の回想や周囲の人、家族の話が説得力をもって書かれてある(4, 6, 7, 8章)。最後の第9章は健聴者の社会に生きる聴覚障害者の叫びである。彼らはわれわれ健聴者がいかに誤った認識をしているのかを知ってほしいのである。

本書は聴覚障害に関する専門書ではなく、一般の人々への啓蒙書と言うべき内容になっている。しかし、聴覚障害の娘をもつ著者夫妻が読者に最も伝えたかったのは、聴覚障害者の人間としてのたくましさ、智恵、人生についてであろう。

(上越教育大学 我妻敏博)